

2年前の3月11日の大震災とそれに続く福島第一原子力発電所の爆発の直後、いくつかの雑誌や新聞に次のようなことを書いた。「テレビに登場する東京電力の幹部にも、原子力安全保安員のなかにも誰一人女性がいらない。これは、国際的にはすごく変な情景だ。もし東電の幹部の半分が女性だったら、もう少しリスク管理が徹底したのではないか」（日本学術会議『学術の動向』2011年6月号など。ネットで読めます）。

人類が（と言っておこう）本格的にジェンダー平等（より正確に言えば、「あらゆる人の人権と環境問題」に本格的に向き合うこと）を指向し始めたのは、1970年代以後のことだ。しかし、日本社会は、この国際社会のジェンダー平等の波に乗ろうとしなかった。こうした動きが始まったとき、ジェンダー平等という点で日本が特に「遅れて」いたというわけではない。欧米も含めて1970年代までは、ジェンダー不平等が「あたりまえ」だった（第二次大戦後、法制度などで「それなりの平等」が達成されていた日本と比べて、キリスト教文化の欧米では、財産権は夫中心で離婚や中絶なども許されていない社会がほとんどだった）。むしろ女性の労働参加率でみると、経済の発達した諸国のなかで、日本は、スウェーデンより上位のトップクラスの社会だった。しかし、40年後の今年のグローバルジェンダーギャップ指数は世界135カ国中101位と、今や、とんでもなく低いのだ。

このジェンダーという言葉、もともとは、女性名詞、男性名詞など、言語と性別にかかわる文法用語だった。なぜ言葉に男性／女性の区別があるのか。おそらくそこには、世界を男女の二項に分類して把握するような世界把握＝世界像構築の構図があったはずだ。実際、時間、方向、家の間取りまで、前近代文化は、男女の二項に連動する世界把握の方法をもっていた（東洋でも陰陽文化のように、陰＝女性、陽＝男性の世界把握図式があった）。この二項図式は、文化や地域、歴史の変化に応じて多様性があった（たとえば、北アフリカのカビル人にとって、昼は男の時間、夜は女の時間であったが、ネイティブ・アメリカンであるナバホ族にとっては、それがまったく逆であるといった具合に）。

縮小社会論にもつながる共生主義の思想家イリイチは、こうした地域や時間に制約された二項図式をジェンダーと呼んだ（いわゆるバナキュラーなジェンダー概念である）。彼は、前近代の世界把握につながるこのジェンダーを、対抗相補的な関係としてとらえた（まさに、陰陽図式のように男女のジェンダーがお互いに、異なる分野を担いつつ相互に支え合うという構図である。ちなみに、この「違いを認め合いつつ支え合う」図式が性差別の原因だとしてイリイチ批判を展開して華々しく登場したのが上野千鶴子さんだった）。確かに、現在の時点から見れば、この対抗相補性の議論は、性差別構造をささえる論理になるだろうと思う。でも、前近代の時代を生きた人々は、この構図が「差別」を内包するなどは考えてもみなかったであろうこともよくわかる。

イリイチ風にみれば、近代社会の登場は、それまで存在していた対抗相補的なジェンダー構図に基づく宇宙像の「ゆらぎ」＝崩壊を生み出した。近代社会の登場によって生み出されたのは、生産性、効率性、機能性といった男性主導の原理に基づく、産業化された社会であり、そこでは女性たちは「影」の周辺の領域に追いやられることになる。いわゆるシャドワーク論である。男性主導で自然破壊を押し進めつつ、女性を無償の労働力として搾取し差別する近代産業社会の問題性があると、彼はいうのだ。当然のことながら、イリイチの戦略は、前近代の対抗相補性の関係に戻ろう（近代産業社会の仕組みをもう一度ひっくりかえそう）というものになる。でも、ぼくたちは、そんなに素直に前近代社会に戻れるだろうか。そう簡単にはいかないだろうと思う。「近代」のもたらした「豊かさ」を捨て、「飢え死に」や「病死」の横行した前近代に復帰することは、ほとんどの人が否定するだろうと思う。ただし、イリイチの指摘した近代産業社会の原理が、男性主導のものであり、この構図を転換しなければ、自然との共生も他者との共生もむずかしいだろうということは、よく理解できる。問題は、ここだ（上野さんが女性原理からの変革を展望したエコ・フェミニズムを徹底「論破」してしまったのは、今からみると、もったいなかった）。

繰り返すが、近代社会を押し進めてきたのは、男性原理に基づく産業社会の論理だ。この産業社会のロジックは、利益や生産性のためなら、自然に負荷をかけることも、人間を非人間的な労働に追い込むことも、また、人間と人間の（相互のコミュニケーションによる親密であるべき）関係を、道具や手段として扱うといったことも、ほとんど気にしない。だからこそ、ぼくたちが縮小社会を求めるとき、最重要の課題の「ひとつ」は、男性主導社会であった近代産業社会を見つめ直し、そこから「どこへ」向かうかを問うことであるのは間違いないところだろう。男性性というジェンダーへの反省的な視座は、たぶん、過剰社会である現代を見直し、「縮小」の未来を構想するために、大きな意味をもつことになるはずだ。